

第九章 従う所は文と武

開元二十二(七三四)年の浅い春。

長い旅から戻った一昨年の夏以来、南園では良好な日々が続く。

元日を迎えた田家は、家伝の法でその年の豊凶を占う。南園ではいずれの法も豊と出た。

昨夜斗廻北

昨夜 北斗七星が北の空を廻り

今朝歳起東

今朝 新たな歳が東の空より始まりました。

我来已強仕

私は四十歳という「強仕」を超え

無禄唯尚農

お上から禄を頂戴することなく農に励んでいます。

桑野就耕夫

桑畑で農夫に手をとって教えられ

荷鋤随牧童

鋤を荷って牧童の後にくっついて行きます。

田家占氣候　田家において氣候を占いますと

共説此年豊　揃つて今年は豊年だと言ふことです。

詩に「強仕」の語を用いた。強にして仕えるとは、心身が充実して官に仕えるに最もよい時期、四十歳だとされる。孟浩然はすでに四十六歳、その肉体は壯強ではない。三十歳のころに大病をし、旅の間に伏せ、南園に戻つてからも体の不調に襲われる。自分に残された時間はどれほどであろうか。

妹が息子の莫淵（ぼくえん）を連れて来ている。

甥を外に連れ出し、その姿を日の光のもとに置く。甥は腕を左右に広げ、拳を握り、胸をそらせて天を睨む。身に纏う戎衣に似つかわしいと、母が教えた。

「大した凜々しさではないか。よく似合つておるぞ」。

孟浩然は若い甥に目を細める。

この年齢のころに自分は何をしていたのか。青巖庵で友と語り、あるいは、一筋の道を求めて鹿門山を歩き回つた。あのころには、身の内側からの刺す

ような痛みがあつた。

莫淵は万里の彼方に行く。まず長安に出て韓司馬の部隊に編入される。そこから西方の涼州に移動し、河西節度使の指揮下に入る。戎衣を纏うが、莫淵は兵士になるのではない。文吏としての職務に就く。辺境の地では、文吏といえど、万一のときは戦の場に立つ。甥は、莫の家を再興する第一歩を踏み出そうとしている。

甥の姿はまぶしいくらいだが、戎衣がなかったならばと想像すると、春の声に聞こうとしてなお吹く風の冷たさに震える蕾のようにも見えるであろうか。他所の息子なら、寒風に負けて凋むのも、打ち克つて花開くのも、己次第と突き放せるのだろうか、幼いころから知る甥ともなれば、我が手でそつと包んで温めてやりたくもなる。最もそうしたいのは妹であろうに、烈風の中へと突き出そうとしている。ならば、伯父としては、他所の息子よりもむしろ厳しくすべきだろうか。

送別の宴で披露する詩を妹に所望された。まだそれがまとまらないのは、

自分に思うところがあるからだ。甥の出発は自分の決意を促すかのようだ。

莫淵は袖を日にかざし、

「今日に間に合うよう、縫って下さったのです」。

「おまえがあれを縫ったのかい」。

孟浩然は隣に立つ妹に言う。

「勿論ですとも。みつともない恰好で行かせる訳にはまいりません。今朝、

こうしてお兄様に御覧いただけようと、夜っぴて仕上げました」。

「どおりで、腫れぼったい顔をしている」。

孟浩然は戎衣に触れ、

「それにしてもよくできている。丁寧によく縫ってある。縫い物が得意でなかったおまえが、これだけ立派なものを作るとは、感心だ」。

「これくらい何でもありません。たまたまいろいろ用事が重なって、縫う時間になかなかとれなくて、今朝になっただけで、そうでなければとつくにできていたのです」。

「これだけの腕があるのなら、今度は私のも頼んでみようか」。

「お安い御用ですとも。何をお召しになりたいのです」。

「そうだな、小科綾羅の朱色の服などはどうだろうか」。

「朱色ですか。それは五品官様のお召し物ではありませんか。そんなものを身に付けるのですか」。

「似合わないかい。ならば紫にしようか」。

「紫は三品官様でしょう。ますますいけません」。

「これだけ立派に縫えるのだから、一品官の服でもいい。亡くなった姉さんも、これはほめて下さるだろう。おまえは何をやっても下手だった。姉さんがいくら丁寧に教えて下さっても、呑み込みが悪く、手こずらせていた」。

「お姉様が呆れていらしたのは、あたしの裁縫ではなく、お兄様の詩だったのではありませんか。いじればいじるほど出来が悪くなると、お姉様はいつもおっしゃっていましたもの。そのお兄様の詩が、どうしたことか、いまでは天下の人々から褒められているのですから、あたしの裁縫が天下一になっ

でも少しもおかしくありませんでしょう。何でしたら天子様がお召しになる大裘毳でも縫って差し上げましょうか」。

「それもよからう。おまえの裁縫にしても、私の詩にしても、姉さんに教わった。あのころから随分と歳月が過ぎた。いつまでも子供だと思っていたが、おまえもなかなかどうして、いまでは大した年齢になっているのだから」。

「あたしだって強仕を超えました。なりたくてなつたのではないのですけれど。強仕といっても、あたしは女なので息子を送り出す立場ですけれども」。

「おまえも四十を超えろとはな。このごろは、姉さんがいらしたあのころが一番よかったと、思い出されることがある。南園も、あのころはよかっただろう」。

「お年寄りみたいに、昔の思い出に浸っているのですか。やめて下さい。あのころの南園は特段よかった訳ではないでしょう。お姉様だってあんなにも苦勞されていたではありませんか。お兄様だって、いつも何だか思い詰めていて、急に剣を習うとか言い出して、あたしたちを驚かせたりしたでしょう」。

あれから何度驚かされたかわかりませんが」。

「若いときにはいろいろとあるものだ。そんな私も、いまではこうして南園のために、なかなかよく努めていると思つてはくれないかい」。

「お兄様が一郎兄さんの後を継ぐと聞いたときには、大変なことになったとお兄様に同情しましたけれども、『よく努めている』と御自分の口から言われると、『何をどう努めているのですか』って、聞き返したくなります。実際のところ、お兄様は何をしているのですか。ぶらぶら遊んでいるだけなのではないのですか。相変わらず詩を詠むだけで」。

「それなりにいろいろとやっている」。

「何をですか。『よく努めている』とかおっしゃいましたけれど、南園の中のこととはみんな郊君がやってくれているのでしょう。外のことはあちらの叔父さまがうまい具合にして下さっていて、お兄様がいろいろしているとは誰も思いません。それでいて、お姉様がいらしたところが一番よかったですか思い出に浸られては、どこまでお気楽なのでしょうと、呆れてしまいます」。

妹はけらけらと笑う。

「君にも、この私が、気楽に遊んでいるだけと見えるかい」。

孟浩然は問われて、莫淵は、

「いえ、私には、どうも。何しろ、母は気が強い人なものですから」。

と、言葉を濁す。

「ほう、そうなのか。おまえは気が強いのかい」。

「あたしがですか。この子がどう思っているか知りませんが、あたしは、御存知の通り、昔からずっとかよわい女で、いまも変わりません」。

「やはり、自分ことは当人が最もわからぬものであるらしいな。姉さんを呆れさせた出来の悪いおまえが嫁に行き、あちらの家で務まるのかと大変心配したものだ。それが、苦労を一人で背負い込んで、よくまあ今日までやって来たものだ。確かに、相当に気が強くなってはならぬだろうな」。

「珍しく褒めていただけと受け止めてもよろしいのでしょうか。苦労がなかったとは言いませんけれど、当然のことをして来ただけです」。

莫淵が生まれてまだ三年ばかりのころにその父が急死し、莫の家は急速に傾いた。妹は莫の家を守って息子を成人させ、河西節度使のもとでの仕事も妹が奔走して手繰り寄せた。

「おまえのことを思えば、私は確かに気楽に遊んでばかりだと認めた方がよさそうだ」。

莫淵を寒風に震える蕾と思ったのは改めなければいけない。この妹の息子だ、同じ年齢のころの自分よりも遥かにしっかりしている。

「そんなお兄様でも、お兄様がいなければ南園は駄目なですから、お兄様とは不思議な人です」。

「私のことはもう置いて、肝心なのは君だ。送別の宴はいつと言っていたかい」。

「明日です。岷山で皆様が開いて下さるのです」。

「で、出発はいつなのかい」。

息子が答える前に妹が、

「明日が岷山で、出発は明後日ですと、さつきあたしが言ったのを聞いていなかったのですか」。

「そうか、明後日か」。

孟浩然はつぶやく。いま決意すれば、明後日でも早過ぎはしない。

「それで、詩はおできになったのですか。明日の宴で御披露したいと思っ
ているのです」。

「それが、まだなのだ。さつきから考えているのだが」。

孟浩然はわざとらしく首をひねる。

「いつも即座にお作りになりますのに。興とかいうものがどこからともなく
やって来て、ぱっと詩ができてしまうのでしょうか」。

「おまえの口からそのように言われると、余程気楽に詩を作っているように
聞こえる。何の考えもなしに、右から左という訳でもない」。

「お姉様には、考えるだけおかしなことになると、笑われていたではありませんか」。

「おまえの息子のための詩とあれば、まるつきり考えなしに作る訳にもいきまい。もうしばらく、立派になった姿を見て、考えさせてくれないかい」。

孟浩然是甥に目を向ける。その姿を見つめるのは、半ば以上、自分の決心を固めるためだ。

莫淵は伯父の視線にたじろぐように半歩下がり、ぎこちなくお辞儀をし、「実は、伯父上にお願ひがありまして。詩よりも、私としましては」。

言い出しにくそうな様子に、孟浩然是柔和な顔を作り、

「どうかしたかい。何でも言ってみるがいい」。

莫淵はほんのり顔を赤らめ、

「これより私は遠く西に参ります。この有難い泰平の御世でありましても、あちらに行けば何が起ころかわかりません。もしものときには、私といえども剣を持たねばならなくなりました。剣を持てば、我が身を顧みるなどしていられなくなりました。私の身に何かのことがありましたならば、この母を伯父上にお託しいたします。父は早くに亡くなりました。その上、私も

いなくなれば、母が莫の家に尽くさねばならぬことはもうないはずです。ここ南園でゆつくりと余生を過ごさせてやっていただきたいのです。どうかお願いします」。

莫淵が深々と頭を下げると、妹は、

「何を言い出すのかと思つたら、あたしのことなのかい。あたしはまだ余生を心配される年齢ではありません。おまえは、お上の御用をしつかりと果たすことだけを考えていればいいのです。おまえが死んだ後での身の振り方は、いまからおまえに心配してもらわなくても、自分できちんとしています。この頼り甲斐のないお兄様に御厄介をかけようなどとはこれっばかりも思つていませんから」。

「そうやって気の強いところを見せ付けなくてもいいだろう。せつかく息子が心配してくれているのだ、素直に受け止めてやればいいではないか。よし、君の言う通りにする。齡をとつて、どんどん口うるさくなる一方の妹だが、南園に来るといふのなら引き取ろう。耳を塞いでいれば我慢もできようから」。

孟浩然は本当に耳を手で覆う。

「あたしを厄介物みたいに言わないで下さい」。

「ありがとうございます。安心しました。よろしくお願いいたします。その上で、重ねてで恐縮ですが、もう一つだけお願いをしてもよろしいでしょうか」。

「ああ、二つでも三つでも、何でも言いなさい」。

「伯父上は、先ほども母が申した通り、お若いころに岷山で剣を習われたと聞いています。その剣を私に教えていただけないでしょうか。私も、西方に行くに当たっては、覚悟をして、剣の一応の稽古はいたしました。伯父上が習われたのは心を強くする剣であったと伺っています。今日一度だけで何かを覚えられとも思いませんが、せめて片鱗だけでも触れられたらと思うのです」。

莫淵は唇を引き締める。

「剣であるか」。

劍の稽古は、石潭で張野人に逢って以来おろそかになり、いつしか全くやらなくなった。ついに身に付かなかった劍を人に伝授するなどできるものではない。

莫淵の表情は真劍そのものだ。寒風に耐える蓄の姿に、心を強くしたいとかつて願っていたころの自分が重なる。今日しか日がない甥の願いを拒んではならないだろう。

「私は雲表観主様に破門された身だ。人に教えてよいとの御許可はいただきたい。もとより劍の真髄は私の知るところではない。上辺をわずかになぞるだけなら、雲表観主様も見逃して下さるだろうか」。

莫淵とともに劍を持つことで、自分の決意を固められようか。そうせよと、むしろ甥に促されているのか。

旅から帰って一年半。長いとはいえないその間に、南園は変わった。

目に見えて最も大きな変化は南園中堂だ。昨年の秋に、創建当時の姿をほぼ取り戻した。南園の衰退をまさに象徴するありさまであったのが、打って変わって南園の再起を強く印象付ける輝く存在になった。

孟浩然の詩名は、旅の間に、当代随一と言われるまでに高まっていた。孟浩然是旅を経て新たな詩境を開いたと受け止められた。その詩を慕う訪問客が、南園にひっきりなしに来る。都で高い地位に就いている人も、都からの旅の途中、あるいは都への帰還の途中に立ち寄る。

孟郁は、名のある人々が訪れる南園において立派なのは自分の住いだけとあっては、己の信用に関わるとして、南園中堂の修復を全面的に支援した。

訪問客は都の貴人、賢人から近隣の農夫、漁夫まで、あらゆる階層に及ぶ。人々は孟浩然に会えるのを喜びとし、詩を贈られるのを栄誉とし、孟浩然とより親しむことが我が名を高めると考え、競って孟浩然のために何かをしようとする。農夫が一束の蕪、漁夫が一匹の魚を届けてくれるような助力も積もれば大きい。

孟大と同じに「忍」の字を書き連ねるようなことは孟浩然にはできない。

己に課したのは二つ。孝と悌。

孝弟也者

親に対する孝と、兄弟に対する悌は

其為仁之本与

仁の根本であるのでしよう。

叔父の孟敬規に万山で教えらえた『論語』の言葉だ。南園の全ての人が兄弟だ。孟郁に示した詩に歌った田家の楽しみをその兄弟とともにする。

把酒話桑麻

酒を酌み交わして桑や麻の出来を話します。

日々に兄弟と打ち解けて桑麻の話をする。

母と農事に励む。老いた母の方が何をしても素早く、孟浩然は足手まといでさえある。そのありさまに、いろいろな人が寄って来て、笑いながら手伝ってくれる。

桑野就耕夫

桑畑で農夫に手をとって教えられ

荷鋤随牧童

鋤を荷って牧童の後にくっついて行きます。

孟浩然の周りに常に人が集まり、賑やかに楽しく作業をすれば収穫も増え

る。

甘蔗を植えた。都で甘蔗好きの評判を取った。卜老人の五色の瓜のように、南園の甘蔗の名を高められないかと夢想する。

南園の経営には種々難しいことがある。南園内のことは孟郊が、南園外のことには孟郁が、もっぱら助けてくれる。孟郁は世の隆盛に乗じ、父の代よりも資産を何倍にもし、それを背景に、政治の様々なところに巧みに食らいついている。孟郊は、父親が一人で背負い込んでいたのを改め、同世代の若者が活発に動けるよう変えつつある。

南園には、女性でなければ務まらない種々の事がある。以前は霍大叔母が全て取り仕切っていた。孟浩然は、その役を孟二の妻の辛氏に任せた。辛氏はもとより聡明な女性で、大叔母も辛氏のすることには文句を付けない。大叔母にしても孟振にしても、自分達がいまさら出しゃばっても付いて来る者がいないと覚ったのだろう、随分とおとなしくなった。

学舎は孟馨に託した。おっとりとした孟馨のもとで、学舎の雰囲気は一変

した。競争が奨励されていた時期には、孟浩然などはかなり萎縮していたのだが、伸び伸びと才能を開花させつつある。褚先生は病みがちで、体調のよいときには学舎に現れ、弟子の様子を眺めて過ごす。孟邕がうまい具合に先生の心に火を付けると、「時よ時、再びは来らず」と、先生は情熱を込めて歴史を講義する。

学舎では、南園の者でなくても、一定程度の素養があつて、衣食を自弁するならば、受け入れるようになった。その第一番の生徒を丁鳳（ていほう）という。すでに実力十分で、学舎に入つてすぐに地方試験に合格し、昨年暮れに、都での試験を受けるために上京した。孟浩然是送別の詩を詠み、「これを持つて張九齡（ちやう きゅうれい）様にお会いしなさい」と渡した。

現在、朝廷に並ぶ人々の中で最も敬うべきは張九齡だ。都から遠く離れた地方で育ち、その地に左遷された張説に見出された。張説の支援を得て官人になると、皇帝の厚い信頼を獲得し、貢挙出身者の先頭を走っている。孟浩然はこの前の上京で知己を得た。丁鳳に会うよう言ったのは、助力を仰ぐた

めではない。張九齡は高官の中で特に高潔で、情実によって貢挙に干渉することはない。丁鳳も官人を目指すのならば、真に優れた人を見ておくべきだ。

丁鳳の試験は終わったが結果はまだ発表されていない。

孟四は、あの日から状元騒ぎを起していない。静かに家で書物を読み、稀に外を歩く。道で出合っても誰とも口をきかない。そうすることで精神の安定を保っているようだ。

孟敬規は、南園に客が来れば酒が呑めるものと心得ている。以前と違い、客人を楽しませるすこぶる陽気な酒だ。南園の人々が集まる季節の行事でも、孟敬規は愉快に昔語りをし、息子の孟邕とともに、皆の笑顔が絶えぬようにはからう。

そのような次第で、孟浩然がしていることといえば、人が来れば歓待し、望まれば詩を作り、母の傍らで人々に助けられて耕し、南園を歩いて逢う人ごとに立ち話をするだけなのである。

数多い訪問客の中で、誰よりも印象的だったのが、昨年秋にふらりとや

つて来た李白だった。

李白は、開元十三（七二五）年、つまり孟浩然が都に行つたのよりも二年前に故郷の蜀の地を出て、それ以来、遍歴の旅を続けている。孟浩然の旅の径路と李白の旅の径路は交差せず、会う機会がなかった。李白の父は大商人であつたらしく、莫大な財産を遺して死ぬと、李白はそれを湯水のごとくに消費して放蕩無頼の日々を送り、劍客と交わつて人を斬つたこともあるという。李白が詩に優れることはすでに知られ、孟浩然もその詩を幾篇か目にしていた。

李白と初めて会つたとき、「燕雀いづくんぞ大鵬の志を知らんや」という「大鵬」が李白で、自分は「燕雀」であると感じた。これまでに王維を初めとする都の俊英にも数多く会い、自分は及ばないと畏れる相手を見もしたが、李白は自分と比較できる相手ではないと直感した。その李白が、孟浩然を敬慕してやまない心を率直に示した。李白は孟浩然の詩をよく理解し、あたかも孟浩然自身のものであるかのような詩句を、己の詩のなかに織り込んで詠ん

だ。

李白は漢水に舟を浮かべて南に去った。かつて見送った魏元忠の舟影が李白の舟に重なった。あのとき魏元忠のもとに浩然の気が集まっていると感じた。それが李白のもとに集まるかのようだった。

一筋の道は南園に留まるものではない。一筋の道はこれまで誰も歩いた者がなく、心惑うてそこを歩むのを、かつての孟浩然は恐れた。誰か一人が歩けば、続く者はいくらでもある。李白が浩然の気に包まれて歩むのならば、自分はその先へとさらに進まなければならない。

このときから今日まで、いつ決意するかだけであった。

剣を水平に構える。

雲表観主に初めて習った日のことが思い出される。魏元忠に続くために、心を強くしたいと思っていた。それは身を焦がすばかりの思いだった。

雲表観主は、劍を切株の上に置き、孟浩然を百歩離れた場所に立たせ、「腕を伸ばし、劍が手の内に入って来るまで、ここにいろ」と言った。雲表観主の真意はいまもわからない。同じことをするのは意味がない。

動くとも知れぬゆつくりとした速さで劍を横に滑らせる。長らく離れていても、型はそれなりに覚えていて。天下のために身を役立たせたいとの当時の思いは、いまも消えたのではない。呼吸を乱さずに劍を水平に保つのに必要なのは失われている。

「このように劍先が揺れてはならない。劍先を揺らすまいとの思いがあつてはならない。そもそも劍を動かそうとしてはならない。劍が自ずと動くようでないといけない。劍の動きを意識すまいと考へてはならない」。

孟浩然是言葉を並べて一人笑い、

「いまの私にはできないことばかりを言った。劍が動くのに身を任せる。それには心が虚ろになつていなければならぬ」。

ひと通りの動きを示してから甥に劍を渡す。

心を強くするために剣を習い、心とは何であるかを知りたいと願って破門になった。その自分が甥に何を伝えるのか。

「試してみなさい」。

莫淵は剣を握って全身を硬直させる。

「ゆつたりと構えればいい」。

これは自分が教えるのではない。雲表観主が教えと思いたい。我が孟家の学問もそのようにして伝わって来たのだから。

妹が見守る前で、型と掛け声の稽古を続けていると、

「おや、もう来ていたのかい」。

孟浩然の母が現れる。

「まあ、あいすみません。お母様のところへ、すぐにと思っていたのです。でも、お兄様が、お仕事が一段落してからの方がいいだろうと言うものですから。そしたら、剣の稽古がこうして始まってしまいました」。

「妙な声がすると思ったら、おやまあ、剣の稽古だったのかい。ほう、ほう、

腰の構えがよくできている。立派になったではないか。もう近々発つのかい。

「明後日です」。

「ほう、そりやあもうすぐだ」。

莫淵は母に呼ばれ、祖母に丁寧挨拶する。

「娘と一緒に来たのでなければ、どこ誰だか見違える。その服はよく似合っている。で、何だって、出発前の忙しいときに、そなたはうちの倅に剣を教えてくれていたのかい」。

莫淵はびつくりした顔で、

「いえ、私が伯父様に教わっているのです」。

「おやまあ、六郎にかい。それは本当なのかい。どう見ても逆だった。六郎ときたら、腰の構えがなっていないし、声だって小さい。六郎は不器用で、剣に限らず、何をやっても、どれも身に添わない。鍬だって、何年たってもろくに使えやしない」。

孟浩然は苦笑いし、

「何十年かぶりです、思い出そうとしていたところなのです」。

「私が伯父様に無理を言ってお願ひしたのです。戦に役立つような剣ではなく、心を強くする剣を教えていただけこうと思つたのです」。

「そうそう、そうだった。雲表観主様にそのような剣を教わると、六郎は言つていた。でも、雲表観主様は大したお方でした。心を強くする剣などないと、一言でお断りすればすむのに、何年もかかつて、自分でわからせようとしたのですから。よくまあ、それだけの忍耐があつたものです」。

母が言つたことに孟浩然は驚く。

莫淵は率直に尋ねる。

「剣では心を強くできないのでしょうか」。

「はあ、はあ、剣は知りません。この南園に来て五十年近く、畑をひたすら耕して来ただけです。耕しつつ、いまだに、よく稔らせたいとか、すぐれたものを作りたいとか、余計なことを思つてしまう。六郎にも教えたけれど、あれはもつともつと余計なことをいつも思つている。大方、剣も同じだろう」。

妹は笑い、

「お母様も、よくわからないことをおっしゃいますけれど、要するに、あれこれ考えず、一心不乱に励めということなのでしょう。あたしだって、針を持つて、うまく仕上げてやるうなどいちいち思っていたら、かえって指の動きがおかしくなりますから」。

まるで聞いていなかったように、孟浩然は莫淵に向かって、

「送別の宴はいつであったかい」。

妹は兄を見つめ、

「またお尋ねになるのですか。明日、岷山です。出発は明後日です。これを言うのはもう三度です」。

「明日の宴に私が行っても構わないだろうか」。

莫淵は母親の顔を窺う。

「莫の家の者や友人が催して下さるごくささやかな宴です。伯父様にお越しいただけるようなものではないのです」。

「お兄様がいらしたら、皆様方は少し驚くかも知れません。お願いした送別の詩は、うちの誰かに披露させるつもりです。もしもできるのが明日になるようでしたら、誰かを頂きに上がらせます。わざわざお兄様にお越しいただかずとも」。

妹が言うのに耳を貸さず、

「私と、それに、洗然、郊君、邕君も連れて行っていいだろうか」。

「伯父様ばかりか、私のためにそこまでしていただきましたは心苦しいです」。「心苦しいのは私の方だ。君の送別の宴なのに、ついでに私の送別も兼ねてもらおうと言うのだから」。

「お兄様の送別。それって何のことです。急に、また、いつもの突然のことですか」。

孟浩然は母の前にひざまずき、

「いま一度、母上のもとから遠く離れますことをお許し下さい。これまでは母上にお許しをいただくこともなく出ておりました。以前のような長旅には

決してなりません。いま一度、お許しいただきたいのです」。

「そうかい、行きたいところがあるのなら行くがいい。おまえが目の前にいると、おまえが何を考えているのかさっぱりわからない。旅に出ていると、何となくわかる」。

「お兄様、今度はどこなのです。あたしは、お母様のように甘くありませんから、返事によっては許しません」。

「都だ。明後日、君と一緒に私も行こう」。

孟浩然は立って莫淵の肩を叩く。

「私ですか。まさか、私のためだとは思いませんが、私でしたら、頼りないように見えます。一人で都に行けます。どうぞ心配されませんように」。

「君は大丈夫だ。剣だって、母上が御覧になった通り、私が教わっているよなものだ。だから、都へと、むしろ君に連れて行ってもらいたい。怯まずにすむように」。

「都に行って何をなさるのですか。服を縫えとか言っていましたけれど、ま

さか、また仕官しようとするのではないのでしょうか。」

「実はそうだ。叶うとは考えていない。それでも、行かずにはいられない。いまはようやく南園が順調である。だから、南園に留まっついてはいけな
いと思えて来るのをどうすることもできない。」

「劍の稽古を見ていて、何かありそうだと感じていました。もつと前からうすうす感じていました。南園のこともあるでしょうけれど、嫉妬なのではありませんか。」

妹は、くくつと笑う。

「嫉妬とは何のことだい。」

「だって、お兄様は、李白様を嫉妬されているのでしょうか。」

「何を言い出すのかい。」

孟浩然は否定しようとして、そのように言われるのなら、まだしもよいかも知れないと思う。李白は遙か上空を飛翔し、自分はそれを見上げる燕雀だ。

しかし、それでも、自分が先に進まなければ、李白も進めないとの思いがあ

る。

「李白様が来られましたときに、鹿門山に退隠したのが本来の自分の思いで、南園を離れることはもうあるまいと、お兄様はおっしゃいましたでしょう。長い旅から帰ってまだ一年でしたから、それがお兄様の本当のお気持ちである、信じたかったのですが、わざわざ李白様に向かっておっしゃったので、かえって疑わしく思えました」。

莫淵はおどおどと、

「都へ行かれるのはどういうことなのでしょう。私とは関係ないのでしたらしいのですが」。

孟浩然はもう一度、莫淵の肩を叩き、

「大いに関係ある。君のその若さが、君と同じところに、剣の稽古に励んでいた私の心を蘇らせた。あのとときの志は、確かにこの私自身のものだった。李白君は蜀を出て何年になるのか。この泰平の世に、あれだけの大才が活かされずにいいのだろうか。孟子以来千年間を顧みて、泰平が実現している

数少ない時代でいまはあるのだろう。そのお蔭で、南園は立ち直れた。このようなきに泰平の果実をむさぼるだけではないけない。身に才能を具えながら、埋もれている者があつてはならない。李白君ばかりでなくその後続く人々のためにも、私が先に歩んでみせなければならぬと思うのだ」。

孟浩然は自分の詩を静かに唱える。

欲濟無舟楫

ここを渡つて行こうとしても舟楫はなく

端居恥聖明

聖天子の御代に端居している私を恥じ

坐觀垂釣者

釣り糸を垂れる人をそぞろに見ては

空有羨魚情

釣り上げられて出世する魚を空しく羨むのです。

かつて岳陽楼で張説に捧げた詩だ。

「世間の人は、この詩は、鹿門寺の隱士にはふさわしくないと感じたようだ。私自身、後悔もした。しかし、これは確かに私が詠んだ詩だ。私が心から詠んだものだ。『端居して聖明に恥ず』は虚言ではない。天下のために何もせず、南園にのうのうと暮らしているのは、孟子の子孫にして浩然を名とする者の

すべきことではない。私は自分の詩に責任を持つ。詩は志だ。嘘が混じってはならない。この前、都に行つたのには、南園の窮地を救おうとの思いがあった。あわよくば、獲得した地位を南園のために利用したいと考えていた。孟子の子孫のすべきことではない。いま南園は心配いらぬ。南園老の曾孫として生まれ、孟子の千年後の子孫として生まれたこの身を、天下のために役立てたい。剣を持てば、その思いがふつふつと湧いて来て、留めようがない」。

妹は嘆息し、

「南園の人でなければ、孟子を持ち出すお兄様のそのような言い方は誰も理解できません」。

母は微笑み、

「この子はいつも御大層なことを言う。母は息子に甘く、祖母は孫にはさらに甘い。こうして見比べて、六郎より淵君の方が余程しつかりしていると思つてしまう。おまえはよく話すし詩もよく書くけれど、腰の構えは淵君の方

がずつといい。ご覧、あの岷山を。宇宙が始まってから一度だってものを言わない。ふらふらと出て行ったりせず、どっしりと根を張っている。おまえたちの父さんが、ああして終日あの山を見ていなければならなかったのか、その意味をよく考えてみるがいい。都でも涼州でも、遠くからでも、岷山を見るがいい。さあ、二人ともさっさとお行き」。

孟浩然と莫淵が何か言おうとするのを手で遮り、

「ごちやごちや話すのは好まない。畑に戻るとしよう。土は何も言わないから」。

母は行ってしまふ。

妹は、

「父さんという人もわからなかったけれど、母さんもわからない。お兄様もわかりません。揃いも揃って、何だかわからない人ばかり。お兄様はもう行くと決めたのでしょうか。仕方ありません。都までうちの息子が道に迷わないですむよう道案内を頼みます。お兄様の役目はそれだけです。それが終わっ

たら、都からさっさと帰って来て下さい」。

莫淵は、

「伯父様に道案内など、とんでもありません」。

「道案内なら私にもできよう。剣を教えるよりはずっといい」。

孟浩然は再び剣を手にする。

所従文与武　踏み行うもとは文と武です

詩句がふつと訪れる。

文と武を兼ね備えるのが古来、理想とされた。褚先生も弓の名手だ。武は戦うためにあるのではない。

不戦自応寧　戦わずして自ずから安らかになる。

剣で心を強くするとの考えは間違っていたのだろう。型を身に付けた先に何があったのだろうか。それは自分の知るところではなかった。雲門観主は、一筋の道を辿らせるために破門してくれたのか。

都に行っても、妹が言う通り、すぐに帰って来るであろう。釣り上げてく

れるのならば堂々と釣り上げられよう。孟子は、天下を改めるために理想を説いて歩き、釣り上げられようとした。理想が容れられなければ、「斉に久しきは我が志にあらざるなり」と郷里に帰った。朝廷にこの自分を用いる度量があるのならば、李白も用いられるであろう。

岳陽楼で二つの道が一つになった幻想を見た。

孟浩然は剣を構える。

一筋の道は、恐らくは、ただ一つの道なのだろう。

■ 田家元日

南園の元日を詠んだ詩。

昨夜斗廻北

昨夜 北斗七星が北の空を廻り

今朝歳起東

今朝 新たな歳が東の空に始まりました。

我来已強仕

私は四十歳という「強仕」を超えまして

無祿唯尚農
お上から祿を頂戴することなく農に励んでいます。

桑野就耕夫
桑畑では農夫に教わり

荷鋤随牧童
鋤を荷って牧童の後について歩きます。

田家占氣候
田家で氣候を占いますと

共説此年豊
それぞれ今年は豊年だと言います。

■ 送丁大鳳進士挙

丁鳳が貢挙の進士科の試験を受けるために上京するのを見送った詩。

題名に「呈張九齡」の四文字が加わっている伝本もある。丁鳳は襄陽の人。「鷓鴣賦」は張華の作品で、阮籍がそれを読んで帝王を補佐する才能がある感嘆した。

吾觀鷓鴣賦
私は古の「鷓鴣賦」とも言うべき君の作品を見て

君負王佐才
君には帝王を補佐する才能があると思いました。

惜無金張援
惜しむべきは、君には貴頭の支援がなかったために

十上空帰来

十回もお上に施策を提案しましたのに空しく返され

棄置郷園老

郷里に棄て置かれて齢を重ね

翻飛羽翼催

翻り飛ぼうとする翼をくだかれてしまいました。

故人今在位

しかし、いまは私の知る人が朝廷におられますから

岐路莫遅廻

岐路に立つてもためらわずに進みなさい。

■ 送莫氏外生兼諸昆季従馬入西軍

莫の家に嫁いだ姉妹の子が、韓司馬に従って河西節度使の軍に入るのを送った詩。

念爾習詩礼

思えば、君は儒家の経典を習って

未嘗違戸庭

まだ家の門より外に出たことはありません。

平生早偏露

生い立って早くに父を喪った君が

万里更飄零

飄零たる万里の彼方に行こうとしています。

坐棄二牲養

親への孝行を棄てて

行觀八陣形
飾裝辭故里
謀策赴辺廷
壮志吞鴻鵠
遙心伴鶴鵠
所従文与武
不戰自心寧

兵法の実践をしようというのです。

立派に衣を飾って郷里に別れ

策を謀るために辺境の地に赴くのです。

君の壮志は鴻鵠をも吞むばかりですが

兄弟を想う情は遙かに君に伴います。

踏み行うもとは文と武です

戦わずして自ずから安らかになるでしょう。